中高生とともに差別と闘う

この一年、終わった?!

吉成タダシ

この一年、終わった?!

コウキとの出会い、このクラスとの出会いは、彼らが中学三年生になるときでした。その年に私は、転任してきたのです。

彼らとの初対面は、体育館での学級担任発表のときでした。そのときの彼らの表情は今でも忘れられず、思い出す度に、プッと吹き出してしまいます。

始業日、新しい六つのクラスの学級担任六人が発表されていく場面です。体育館の空気がその瞬間、張り詰めます。このときばかりはどの子たちも、祈るような思いで、前に整然と居並んだ先生方をじっと見つめます。中学生活三年間、義務教育九年間、締めくくりの最後の一年！　それぞれが、想いの先生になることを祈り、胸をドキドキさせながら、少し不安げな眼差し、紅潮させた頬、ゴクリと息を呑んだ表情で、じっと見つめています。

二年生からの持ち上がりの先生であれば、「おー！」とわきかえり、そうでなくても顔見知りの先生であれば、どよめきが起き、子どもたちは実に素直に反応していきました。いよいよ、私の番です。

「五組は…」

私の名前が読みあげられた瞬間、五組の列に並んでいた子どもたちの表情。お辞儀をしてニッコリ微笑む私に向けられたその表情は、何とも言えないものでした。呑んだ息をどう吐き出せばいいのかわからず、固まったままのその表情が、私にはおかしくておかしくて。できることなら二年生からの持ち上がりか、顔見知りの先生だったらと思っていたことでしょう。それが、見も知らぬ私だったわけです。

彼らが卒業したあと何度か集まり、そのときの話題が出たことがありました。何人かがこう白状しました。

「めっちゃこわそうな先生と思った」

「この一年、終わったと思った」

その場にいたみんなで大爆笑しました。きっと同じような思いだったのでしょう。けど、あの瞬間、紛れもなく私はこう胸に刻んでいたのです。

「絶対に、最高の笑顔で卒業を迎えてみせる！」

私の決意

私は転任が決まったとき、ある一つの決意を胸に抱いていました。

実は転任したその中学校は、私の母校でした。古びた校舎も黒ずんだ壁も、年季の入った窓枠もそこにある落書きも、どこか忘れられない記憶の一コマのような気が、私にはしていたのです。

「地元の学校での勤務はやりにくい」と言われることがあります。確かにそういう一面もあるとは思います。でも、地元の人間だからこそ分かることもあります。部落問題においては、被差別部落を校区に持たない中学校。しかし、そこに生まれ育ち、暮らしてきた人間だからこそ分かる、地区に対する差別意識。放っておけばヒトゴトで終わらせられる世界。でもこういったところがワガコトとなって初めて、差別解消が前進していくと思い続けてきた私にとって、この一年間は一つのチャレンジだったわけです。この学校で、これまで取り組んできた私の部落問題学習が通用するなら、可能性はもっと広がるかもしれない。けど通用しなければ、私の取組は一般性を持たず、チャレンジは躓いてしまうことになるかもしれない。それは、何としても私自身が許さないことでした。そんな決意を胸に抱き、転任してきたのです。

それなら自分で！

子どもたちとの取組は、早速四月からスタートしていきました。私は部落問題についての学習がどれくらい入っているのかを確認したあと、「SEASONS」という私小説のような資料を読み合うことにしました。

この「SEASONS」という資料は、私やかつての教え子たちが大切にしてきた劇のシナリオを、私小説風に書き替えたものでした。

一九九〇年代から、テレビや映画で障がい者や在日をテーマにした恋愛ドラマが、ブームのように次から次へと出てきました。それはそれで私もすっかりはまってしまい、手話サークルに通って手話の勉強をしたこともありました。手話を通じて障がいのある方々と出会ったり、中学生と一緒に障がい者問題について学び合ったりもしました。在日問題にしても、そのころになってようやく認識し、様々な学びを得ることにもなりました。

この一種の社会現象について、「単なる流行りになりはしないか」とか、「興味本位に差別を描くな」といった危惧や批判もあったと思いますが、私にすれば、関心を持つ一つの大きなきっかけになったことに間違いはありませんでした。

ですが、待てど暮らせど、部落問題だけは、メディアの表舞台に出てくることはほとんどなかったのです。

「どうして他の人権課題は取りあげられるのに、部落問題は出てこないのか」

「是非はあっても、まずは議論の舞台に上がらねば、前に進むこともできないじゃないか」

「社会問題を積極的に取りあげるのはメディアの大きな責任であり、役割ではないか」

そんな憤りを抱きつつ、それでも何とかして若者に部落差別の問題をきっちり根づかせたいと思い、行き着いた先が、「それなら自分でシナリオを書いて劇を上演しよう！」でした。中学生と世代の近い若者中心の、部落問題をテーマにした青春ストーリー。それが、「SEASONS」だったのです。

（次回「ストーリーに終わりなし」）

イラスト　中島　亜唯